

私のミクロ経済学遍歴

——謝辞に代えて——

池 田 一 新

古稀記念論文集の発刊に当たって、「謝辞」を書くようにとのことであるが、私のミクロ経済学研究遍歴ともいうべきものを綴って、謝辞に代えさせて頂きたい。

私の経済学との出会いは、終戦に伴う復員後、高島素之訳『マルクス・資本論』全5冊（改造社版）を手に入れた時に始まる。その時には、戦争中聞くだけでお目にかかれなかったものという全く「新しものがり屋」的関心からこの書物を手に入れたのであるが、中身を開いて見ての難解さが、反って知的好奇心をそそることになり、何とかして読破したいという意欲を盛り立てることになった。偶々昭和21年に河上肇「資本論入門」第1分冊が出版され、さらに1年おいてから約半年毎に計5分冊が出版された。今にして思えば、この半年毎に各分冊が出版されたことが私にとって、この入門書（それは資本論第1巻への入門書であったが）を熟読し、マスターすることを可能にしたようである。

他方における農業問題への実体験的関心と共に、経済学を体系的に勉強したいと考えるようになり、その為には大学で学ぶ以外にないと思いついて、故郷（愛媛）をあとに、文字通り笈を負うて上京したのが昭和24年であった。

政経学部に入学後も、資本論の読破に努力すると共に、価値論の追求に

については、特に宇野弘蔵「価値論」をほとんど暗記する位に読み返した。昭和27年に、卒業と共に「助手補」として採用され、研究に没頭することができるようになった。この頃から私は、いわゆる「価値と価格の乖離」の問題に悩まされるようになった。この乖離は量的メカニカルな問題ではなくて、質的ケミカルな問題ではないかということである。そこでこれに関連した書物に目を通していているうちに、小泉信三「価値論と社会主義」を読むことによって開眼された思いであった。すなわち「労働が価値になるのではなくて、価値があるから労働するのではないか」という極めて明快な論旨である。この書を転機として私の目は主観価値学説へ移っていった。それ以来、メンガー、ボエーム・バヴェルクならびにウィーザーというオーストリア学派、さらにこれらに関連してジェボンズの著書へと、とりつかれたように研究を進めた。ウィーザーによって示された価値帰属論から、さらに、J・B・クラークの限界生産力説に移行するには、それほど時間がかからなかったように思う。

ところで、当時(昭和30年代)私の担当科目は「近代経済学」であった。講義のために、近代経済学の参考文献を読んでいるうちに、方法論に関して、価値(労働価値にせよ限界効用価値にせよ)を論ずることは「両手で拍手をして、音を出したのは右の手か、それとも左の手かと問うようなものである」というマーシャルの言葉が引用されているのを見て、価値論は形而上学的なものであり、経験科学としては価格そのものを対象にしなければならぬことを教えられた。それ以来、国民経済の基礎ともいべき位置づけをもつ価値を論ずるのではなくて、価格決定の2要因=需要・供給の説明ツールとしての効用理論、費用理論の追求に観点を転換することになった。

さらにまた、そのような経験科学的観点からすれば、価格理論の主な課題は完全競争や独占ではなくて、これらを両極限とする不完全競争になら

謝 辞

ざるをえないのである。いいかえれば寡占(的競争)、多占的競争が課題となるのであるが、その研究の土台となったのは、昭和32年に翻訳した『シュタッケルベルグ・理論経済学の基礎』であった。クールノー、エッジワース、シュタッケルベルグの寡占研究、ならびに多占的競争におけるチェンバリン、ロビンソンの著書が私に不完全競争研究の手引を与えてくれた。特にチェンバリンの非価格競争(広告)分析は、ライアン(Ryan)、クレレ(Krelle)の生産物分化競争分析とならんで、私の非価格競争理論展開に大いに貢献してくれた。これらの研究をまとめたものが昭和38年刊行の「不完全競争の理論」である。

価格理論は本来静学的なものである。そこで、次の私の課題はこれを如何にして動学化するかということであった。このための第1の手引になったのは、シュムペーターの『経済発展の理論』である。だがそこで説かれているのは、完全競争者ともいふべき立場にある企業者であり、自らが開発したものではなくて、外部で開発されたものをイノベーションとして導入することを通して経済発展に寄与するという形のものである。ところが現実には、ビッグ・ビジネスが自ら開発してイノベーションを行うということ、すなわち不完全競争者の行動が問題なのである。このような観点から第2の手引となったのが、J・M・クラークの『有効競争理論』(Competition as a dynamic process)である。ここでは自らの手で新製品を開発しうる不完全競争者によるイノベーションの導入が取り上げられている。この理論にヒントを得て、しかもノリス(Norris)の新しい財概念「補完的代替財」を中間項として導入し、ミクロの競争とマクロの経済成長を結合して展開したのが、不完全競争の動態理論ともいふべき「有効競争の理論」である。これは昭和40年に刊行した「近代経済学」の第7章で発表したものである。それ以来の私の課題は、不完全競争の静態理論・動態理論を体系的な a Book として大成することであった。したがって、そ

の後の私の研究はこのスケルトンともいべきものに、如何に肉付けを行うかということに注がれたといっても過言ではない。その成果を公刊したのが「競争・独占の経済学」（平成3年）である。これは（おこがましくも云わせて頂ければ）私自身にたいするマイクロ経済学の修了証書ともいべきものである。

経済学の道は遠い。さらに、私の次の課題はマクロの領域におけるニューケインジアンモデルか、それともニュークラシカルモデルかについての整理・決着ということである。しかも馬齢を重ねて既に70歳であるが、私の口癖は「40, 50は鼻たれ小僧, 60, 70働き盛り」であり、かつ私が日頃尊敬してやまない大野信三先生が昨年、90有余歳にして「社会経済学」という大著を上梓されたことを思えば、「日暮れて道遠し」などと云えたものではない。熟年をさらに実りあるものにするこそ、42年間にわたって学究として育てて頂いた政経学部、ひいては明治大学への御恩報じの一端であり、古稀記念論文集に御寄稿頂いた各位の御厚情に應えるものであらうと思考する次第である。